

平成二十三年一月一日発行 第二十一巻第一号 通巻第三五号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成23年1月号

岡井省二創刊



初 凧

高橋将夫

決 心 を 形 に す れ ば 初 比 叡
計 画 は 大 ま か で よ し 初 御 空
食 積 の 中 に ひ し め く め で た さ よ
書 初 は 深 呼 吸 か ら 始 ま り ぬ

初鴉 やさしき声を発しけり
しばらくはじつと見つめる初鏡
きつちりとかるた並べる子なりけり
去年今年鈴つけられぬ亀の首
双六を上がれずにゐるそぞろ神
初凧に眠つてゐたるポセイドン
乗り初は始発の銀河鉄道で

槐安集

水野恒彦

後の雛どの顔かんぼせも夢のいろ
照葉煌々と翁の位かな
黄落は烟のやうな匂ひせり
金木屋の香にまみれ羽化登仙す
冬桜稚子みづこをくくりつけし胸

延広禎一

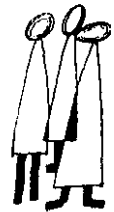
将棋盤に鷹絡み合ふ宇宙かな
摩訶の湯のまろきに浸る真夜の月
桃色の蟋蟀現れけり南無三宝
みんなちがつてみんないい大花野
小春日のうるうる鑑真和上の眼

加藤みき

鷹柱うみやまかはに挨拶す
秋扇なれどしつかり使ひをる
白波は海のダンスよ寒日和
松の露先生本ができました
天界の随喜の涙富正月

石脇みはる

考へる葦いきいきと枯に入る
空間に何をえがかう雁の棹
振りあげし拳はどこに花八ツ手
川波の月影をもて流れけり
山荘の冬に入りたり甘雨あり



中島陽華

朝露を踏んで数奇屋へ熨斗袋
式台に鶏上る秋祭
藍舐むや二十三夜の月皓と
霜晴れの田畑広がり三輪の山
み熊野の光ぞ暁けの粘菌は

竹内悦子

鬼やんま群れて涅槃の山にをり
色変へぬ松の影なる寿老人
鉄色のぬるき湯にをり秋の蛇
夜つびての水道工事おけら鳴く
無花果を煮つめてをりぬ笑尉

栗栖惠通子

祝岡井倉一の風景一上梓
帯文に代へ曼珠沙華・曼珠沙華
肉髻のなべて右巻く遠銀河
泥杭にあぶく寄りける月夜かな
こもり喪の明けて花野となりにけり
大日の首にしわある稲穂かな

大島翠木

パンパスグラス長生したる呪文かな
遺言に延命不可と檸檬かな
美男葛濡れて生まるる命かな
根の国もかくやと冬の桜かな
けふの次あしたもありぬ海鼠かな

雨村敏子

祝「岡井省二の風景」上梓
仲秋も岡井省二の風景も

月光やかたちなきもの照らすかに
月光の隈なくいのち睡りける
月涼し毛馬を過ぎたるあたりかな
十六夜の淡雪羹や万歳まざいらく楽

小形さとる

色ながら散るやほとけのたなごころ
弟切草酒の仕業にしておくか
錠彫の顔で笑うて葛掘るや
日が来ればすなはち金の芒原
青鷹もろかへりパゴタの白を残しけり

本多俊子

省浄忌み霊は秋の山河かな
つまべにやはなしをすればはじけさう
佛眼の虚空あつめて秋ざくら
深秋といふ眩しさに触れぬたる
秋の声大きな石の坐りたる

久津見風牛

雁渡るいきなり蓮如の腓かな
コスモスの靡けど雲に追ひつけず
狐火やころりと用事忘れたる
脛巾干す茸の匂ひぬけぬまま
きたまくら念仏鯛としぐれけり

きたまくら念仏の名

近藤 きくえ

支へられ今日の吾あり水引草
しなやかな手で差してをる穴まどひ
萩叢のうすもも色の風まぶし
日の差して笑ひだしたる通草かな
秋気澄む一刀彫師の柔和な目

近藤 喜子

夕鴨の鳴き止み海の消えにけり
われに捕まるとは育ちよき蟋蟀
恐竜の生まれてきさうなる朱戀
真葛いちいち触れてみたくなる
身にしむと多聞天いへばみな黙る

谷村 幸子

葛城の連峰はるか萩の道
ながめみてどれも引かずよ草紅葉
天高し神の水もて口すすぐ
畦道やおんぶ飛蝗に先越さる
松手入れ今宵の星と何話そ

瀬川 公馨

日表や日裏やぐいと鯛引く
鮮やかな海鞘のししむら秋彼岸
万燈の法華三昧なりしかな
昨夜吹くやイングリッシュ・ラベンダー
秋の山耳を塞ぎてゐたりけり

久保東海司

秋すだれ捲き聞法の座ごしらへ
紅葉鮒跳ねて秤目定まらず
流燈の火種流燈より貰ふ
萩叢の風押し戻す力あり
子と酌みて酔ひほのぼのと鎌祝ひ

松原仲子

栗鼠の尾の太くなりたるそぞろ寒
つぶやきに皂角子鳴つてをりにけり
急に風吹きわたりたる濁り酒
山の日の衰へやすき種瓢
薄く切るさしみこんにやく万年青の実



槐市集

犬塚芳子

野路の秋迷ふこころの失せにけり
毒茸己が天下と笑ひをり
柿食べてすんと物を忘れたり
風を聞くせきれいの耳あるやなし
夕映やコスモスの夕風の夕

犬塚李里子

鞍馬なる晶子書齋や藤袴
カルメンのステップ高く酔芙蓉
摩周湖や霧の粒子となり巡る
明星にゆつたり海鼠動きだす
おのがじし何か抱へて冬に入る

山根征子

幸せと思へば赤き紅葉鮒
韋駄天の一つ走りや野分晴
立冬や巨石莊巖城の闇
花追ふか桜紅葉の散るさまよ
秋茄子の旨さの分かる齢かな

吉田順子

安達太良の雲瓢々と梅擬
身に入むや言の葉一つ気にかかり
佇めばここが真ん中芒原
秋の灯やはるかなる日の母の背
風去りて足元の萩弧を正し



槐集

高橋将夫選

星月夜暗黒物質ダークマターといふ媚薬 守口 柳川 晋

触媒は月光クロスカップリング
いなつるび交尾つるび膨張する宇宙

迦楼羅かる軽らかに宇宙の渡り鳥
根拠なき自信雀は蛤に

新しき朝を迎へ白芙蓉 枚方 中野 京子

振り上げる剣の影の秋気かな
高齡でなくて紅齡竜田姫

大根の双葉の光る雨上り
大夕日の包む一日ねこじやらし 富松 寛子

大花野靈峰はるかに莊嚴す
赤松の下は根の国秋の蛇

大楠の影膨らみて小鳥来る
むらさきの光を放ち返り花
夜は夜の道あり白き曼珠沙華

海の色裏返しては秋刀魚焼く 枚方 熊川 暁子

隠元豆いんげんの曲りたくなる夕まぐれ
芋の露ころと蛇笏の空うごく

ひもろぎの風吹きぬける稲の原
稲の香の大和盆地くんなか過ぎる昼の月

理趣経や蓮の実とびて我が願 東京 西村 純太

地の涯をゆくはこの世の穴まどひ
裸婦像や天をあざむく曼珠沙華

かなかなや無何有の郷と思ひをり
何ゆえに落雁美しき火宅かな 守口 岩下 芳子

吟行の袋たたけば木の実出づ
紅葉山の乾にありし窯の跡

新松子鱗片青く育ちけり
金木犀盛ん小児科医院閉づ
椋鳥の寝ねよき枝を奪ひ合ふ

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

いなつるび交^尾び膨張する宇宙 柳川 晋

宇宙は今も膨張を続けているという。稲妻がもつれ合うのを見て、膨張する宇宙を思うあたりがいかにも作者らしい。

「蛇がまぐはひ真空に虹また虹 省二」という句がある。蛇のまぐわいで、真空に二重虹が発生したという景である。古代人にとって虹は巨大な蛇だったという。絡まる蛇は二重虹なのだ。「真空に虹が現れて、消える」のは「空即是色」の世界である。先師の華嚴・密教的宇宙観の具象化として注目される句で、別の機会に詳しく考察してみたいと思っている。

「触媒は月光クロスカッピング 晋」も一言コメントしておきたい一句。クロスカッピングは異なるパーツ同士を結合させる化学反応。その触媒が月光だという作者の発見に驚かされる。ノーベル賞ものかもしれない。

大夕日の包む一日ねこじやらし 中野 京子
大きな夕日の中でねこじやらしが揺れているだけの景。いろんなことが有った今日一日だったが、大きな夕日はまるでもろもろのことを包み込むように輝いているという。夕暮れの安堵感がよく伝わってくる一句。

大花野 霊峰はるかに荘厳す 富松 寛子
霊峰と大花野の情景。緊張感と安らぎを同時に感じさせる作品である。句の姿が美しい。

芋の露ころと蛇笏の空うごく 熊川 曉子
芋の広葉の露がころんと落ちて、甲斐の空が動いたという。雄大な自然が秋天と芋の広葉の露の対比のなかで見事に描かれている。〈芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏〉

かなかなや無何有の郷と思ひをり 西村 純太
「無何有の郷」は自然のまま、なんらの人為もない楽土。莊子の唱えた理想郷である。かなかなの声を聞きながら縁側に一人すわっていた子供頃の故郷が懐かしく思い出される。

吟行の袋たれば木の実出づ 岩下 芳子
袋の中からどんなよいものが出てくるのかと思つたら木の実だったそう。吟行ではよい句ができたのであろうか。句は拾えなかつたけれど、木の実を拾ったからまあいいといったところか。ささやかながら、好感の持てる一句。

深秋や喪服で通る鹿ヶ谷 谷岡 尚美
谷間を喪服の人が通つてなが面白いのか。深秋の季節がいい。鹿ヶ谷の場所がいい。喪服の登場人物がいい。

秋のながむしここで遊んではをれぬ 大山 里
蛇さん蛇さん、こんなところで遊んでいる場合じゃないでしょう。もう冬がそこまで来ている。早く穴へ入りなさいといったところか。

どぶろくや書院にありし武者隠し 前田美恵子
忍者屋敷や武家屋敷じゃなくて書院に武者隠しがあったとは。落ち着いて勉強しておれないぶっそうな時代だったんですね。
(以下略)